

『源氏物語』における常陸太守の官職と末摘花

蓑津, 碧
九州大学大学院 : 博士後期課程

<https://hdl.handle.net/2324/7393735>

出版情報 : 語文研究. 138, pp.30-43, 2024-12-24. 九州大学国語国文学会
バージョン :
権利関係 :



KYUSHU UNIVERSITY

『源氏物語』における常陸太守の官職と末摘花

蓑 津 碧

一 はじめに

『源氏物語』に登場する末摘花の人物像は従来、醜貌や和歌の詠みぶり、古めかしさといった特徴から探られてきた。しかし、二世女王であること、特に常陸太守の娘であることには重きをおいた先行研究は決して多くない。光源氏は自身の庇護下にある女君に対し「人のほど」を意識した対応を心がけており、末摘花に関しては、

常陸の宮の御方は、人のほどあれば心苦しく思して、人目の飾りばかりはいとよくもてなしきこえたまふ。

他の官職の場合、例えば、故常陸宮同様に娘が光源氏と関わりのある桃園式部卿は、宿老の親王が担う式部卿の地位にあり、没したことを奏上された冷泉帝は「いよいよ世の中の騒がしきこと」（薄雲巻、②四五三頁）と思い嘆いている。また、娘の朝顔斎院に関しては、

（初音巻、③一五三頁）

「前略）その中にも、やむことなき御願ひ深くて、前斎院などをも、今に忘れがたくこそ聞こえたまふなれ。」と申す。

（若菜上巻、④二一八頁）

とあり、朱雀院に対し女三の宮の婿として光源氏を勧める女房が、「光源氏は身分の尊い女君を妻とすることを願つており、その証拠として朝顔斎院との繫がりが今でもあるのだ」と告げる描写から、父親王の地位も朝顔斎院の社会的な地位に影響を及ぼしている様子がうかがえる。

このように、父親王の造型と女君の人物像が繫がりをもつことが可能でありますから、末摘花と故常陸宮の繫がりを官職から見る先行研究はほとんど見受けられない。故常陸宮自身に焦点を当てた研究が多くないことも、その理由のひとつであろう。

まず、『源氏物語』の古注釈書としては、一条兼良の『花鳥余情』で常陸太守に関する言及が行われた。『花鳥余情』は「光孝天皇承和五年正月任常陸太守其後貞純親王代明親王元長親王等任し侍る也」常陸太守に補任されたことのある数名の親王の名を連ねただけであり、その准拠については詳らかにされていない。しかし、これを踏まえたうえで池田亀鑑「源

氏物語の構成とその技法^(注4)」は、夕顔巻巻末の「過ぎにしも今日別るも二道に行く方知らぬ秋の暮かな」（夕顔巻、①一九五頁）が、代明親王が故常陸宮を造型するため想起されたのであろうと述べる。また、代明親王の弟であり、黒貂の毛皮に関する逸話^(注5)や学問を好んだことで知られる重明親王の長子、源邦正の容貌^(注6)が、末摘花に重なることを指摘する。

次いで栗山元子「末摘花巻における引用の諸相^(注7)」は、出家の後の経済的不如意や、常陸太守へ二度の補任がされたという経緯から、故常陸宮のモデルとして、文徳天皇皇子である惟喬親王の存在を挙げる。

そして塙原明弘「常陸の宮の晩年の姫君^(注8)」では、極官である常陸太守の補任期間に、紫式部の祖父が常陸介をつとめた可能性があることから、昭平親王を故常陸宮の参照事項として挙げている。また、昭平親王には美しい娘がいるため、読者は昭平親王の想起によって美しい女王の登場を予想し、結果として末摘花が醜いことに対する衝撃が増すと述べる。

このほか、坂本共展「源氏と末摘花^(注9)」では、登場人物の年齢や朝顔斎院の前任者の退下といった出来事から、故常陸宮を桐壺帝の異腹兄弟であるとし、末摘花が二条東院に迎え入れられた理由を桐壺帝縁のものであるとする。

以上の先行研究に対する見解は後述するが、故常陸宮のモデルに関する先行研究は、いずれも主に一人の親王をモデル、もしくは参考事項として挙げている。その中で池田論文が、末摘花のモデルとして指摘した源邦正の父・重明親王について、黒貂の毛皮に関する逸話や、学問を得意としていたことに言及した点は看過すべきではない。ただし、池田論文は故常陸宮のモデルについて代明親王に対する指摘にとどまつたために、末摘花と故常陸宮の人物造型における直接的な繋がりを提示するには至らなかつた。

そこで、朝顔斎院が父親王の官職によって社会的地位に影響を及ぼされたように、官職が親子の人物造型に関わるものとして考察を行うことが必要になつてくると想定される。從来行われてきた史実と作中人物が一対一となるモデルの特定を避けることで、末摘花と故常陸宮の人物造型における関わりが明らかになると仮定し、本稿では常陸太守という官職から故常陸宮、そして末摘花の人物造型について探つていく。

二 史実における常陸太守

こと、および無品親王に対する経済待遇の保障を目的として設置された官職である。国守の得られる主な収入源である公廨稻の数を見ると、上野国・上総国の国守が得られる公廨稻がおよそ二万九千束であるのに対し、大国である常陸国はおよそ三万六千束とはるかに多い。本稿末尾に付した、桓武朝から後一条朝までの常陸太守の補任歴を整理した表を参照すると、常陸太守が二度続けて補任された例はないことは明らかである。これは、常陸太守の経済的安定が理由のひとつであると考えられる。ただし、経済的基盤が不安定な親王が補任されるとは限らず、主に四品親王が任じられ、約四年の任期をもつて交替した。

次に補任の傾向に関し品位以外の要素として、常陸太守を補任された各親王とそれぞれの任期における天皇の血縁関係も確認したい。昌泰三（九〇〇）年までを対象として調査を行つた安田政彦「親王任国」^{注8)}では、清和朝において賀陽親王以外が清和天皇と父を同じくすることに言及しており、昌泰三年以降について独自に調査を行つたところ、朱雀朝・円融朝にも同様の傾向が見られた。

常陸太守とは天長三（八二六）年、清原夏野の奏上^{注7)}をもつて、上野・上総の二国とともに親王任官職のポストを増やす

さらに、常陸太守補任歴のある親王の極官や最終官職を見していくと、極官を常陸太守とする親王に貞数親王・昭平親王、最終官職を常陸太守とする親王に人康親王・貞数親王・貞真

表

清和				文德			仁明			淳和			天皇
八七二	八六八	八六四	八六〇	八五七	八五三	八四八	八四四	八四〇	八三八	八三四	八三〇	年代	常陸太守 (年齢)
(一九) 惟恒親王	(一八) 惟彦親王	(二二) 惟喬親王	(六六) 賀陽親王	(二八) 仁康親王	(六一) 仲野親王	(一八) 時康親王	(五八) 葛原親王	(四〇) 葛井親王	(一九) 忠良親王	(三四) 葛井親王	(四五) 葛原親王	二品	品位
四品 (八七五) 治部卿	四品	四品	二品	四品	二品	四品	一品	四品	四品	四品	四品	式部卿	兼任
母父 ...文德天皇 藤原今子	母父 ...滋野奥子	母父 ...文德天皇 ...紀靜子 (更衣)	母父 ...多治比真宗 (夫人)	父...仁明天皇 藤原河子 (女御)	父...仁明天皇 ...桓武天皇 (女御)	母...藤原沢子 (女御)	父...仁明天皇 ...藤原沢子 (女御)	のちの光孝天皇	大宰帥再補任 (八五〇)	極位 ...二品	極位 ...一品	極官...式部卿	父母
極官...兵部卿	極位...三品	極官...四品	極官...四品	極位...四品	極位...四品	極位...一品	極官...式部卿	極官...式部卿	極官...式部卿	極官...三品	極官...式部卿	式部卿	備考

円融	朱雀			醍醐			宇多	光孝	陽成		天皇	
九七七	九三六	九三〇	九二六	九二五	九二四	八九八	八八七	八八四	八八〇	八七六	常陸太守 (年齢)	
昭平親王 (二十四)	有明親王 (二六)	代明親王 (三二)	貞眞親王 (五〇)	代明親王 (二二)	貞數親王 (二三)	貞固親王 (二二)	貞固親王 (二二)	貞固親王 (二二)	貞固親王 (二二)	時康親王 (五〇)	惟彦親王 (二六)	
四品	四品	四品	四品	四品	四品	四品	四品	四品	四品	四品	四品	式部卿
母...藤原正妃 (更衣)	父...村上天皇 (女御)	母...源和子 (女御)	父...醍醐天皇	母...藤原諸藤女	父...清和天皇 (更衣)	母...藤原鮮子女 (更衣)	父...清和天皇 (更衣)	母...在原文字子 (更衣)	父...橘休蔵女 (更衣)	母...橘休蔵女 (更衣)	父...橘休蔵女 (更衣)	治部卿 尹
最終官職...常陸太守	極官...兵部卿	極官...中務卿	極官...常陸太守	極官...常陸太守	極官...常陸太守	極官...常陸太守	極官...常陸太守	極官...常陸太守	極官...常陸太守	極官...常陸太守	極官...常陸太守	大宰帥再補任 (八八四)

※村上朝・冷泉朝・花山朝(後一条朝では新たに補任され
る親王が見えないため省略した)。

親王・昭平親王の名が確認される。『源氏物語』に登場する故常陸宮の補任歴は不明であるものの、少なくとも出家した様子はなく、さらに極官ないしは最終官職を常陸太守としたものと考えられる。史実に見える親王群も、故常陸宮と同様に出家の様子もなく、極官もしくは最終官職を常陸太守とする人物が複数名存在したことは明らかである。

また、大宰帥の補任傾向からも、常陸太守補任の傾向が見えてくる。安田政彦「親王任国太守と大宰帥の補任について」^{注9}が指摘した太宰帥補任の傾向は以下五点である。

- ①収益が三国太守と大きく変わらない点
- ②大宰帥が九国二島を統べる中央官的役割をもつ点
- ③九世紀に多く三品の親王が補任された点
- ④四品親王の大宰帥補任の理由として天皇の寵愛が考えられる点
- ⑤大宰帥に再補任された親王のほとんどが晩年である点

これによつて同論文は大宰帥に優遇的な意味合いを認めてゐる。特に、四品で大宰帥に補任された親王は仲野親王・惟喬親王・宗康親王・惟彦親王が、大宰帥に再補任された親王に葛原親王・賀陽親王・仲野親王・時康親王がそれぞれ該當を次節では探つていく。

以上より常陸太守という官職の特徴を整理すると、
する。再補任された親王として、宗康親王以外は常陸太守の補任歴が見える。^{注10}また、葛原親王・時康親王は常陸太守再補任の経験をもち、ともに常陸太守に再補任された直後に大宰帥に再補任されている。よつて、常陸太守に再補任されるということにも親王に対する優遇の意味をもつ可能性があると考えられる。

以上より常陸太守という官職の特徴を整理すると、

- ①常陸太守は比較的裕福な経済基盤をもつていたこと
- ②経済面・社会的地位として比較的優遇された官職であったこと
- ③特定の時代には天皇の兄弟が補任される傾向にあつたこと

が挙げられる。また、極官や最終官職を常陸太守とする親王がそれぞれに見られたことは重要な点であり、故常陸宮のモデルとして複数名の親王の影響があると考えられよう。

では、常陸太守を補任した親王の特徴として官職以外にはどのような点が見られるのか。桓武朝（後一条朝における常陸太守を補任された親王と『源氏物語』の故常陸宮の重なり）を次節では探つていく。

三 故常陸宮と常陸太守を補任した親王

経済状況に關し、史実では比較的裕福な経済基盤があつたことは先に述べた通りであるが、故常陸宮については以下のような描写がある。

・いといたう荒れわたりてさびしき所に、さばかりの人の、古めかしうところせくかしづきすゑたりけむなごりなく、

いかに思ほし残すところなからむ、かやうの所にこそは、昔物語にもあはれなることどもありけれなど思ひづけても、

(末摘花巻、①二六九頁)

・「あはれ、さも寒き年かな。寿ければ、かかる世にも逢ふものなりけり」とて、うち泣くもあり。「故宮おはしましし世を、などてからしと思ひけむ。かく頼みなくとも過ぐるものなりけり」とて

(末摘花巻、①二九〇頁)

このように、窮乏ぶりが何度も描写されるのが特徴的であ

る。しかし、故常陸宮存命時はそうではないと考えられる。女房たちが傍線部のように困窮にひどくあえぐことはなかつた様子を述懐していた点や、

・聴色のわりなう上白みたる一かさね、なごりなう黒き桂さかねて、表着には黒貂の皮衣、いときよらにかうばしきを着たまへり。古代のゆゑづきたる御装束なれど、

(末摘花巻、①二九三頁)

・御調度どもも、いと古代に馴れたるが昔様にてうるはしきを、なま物のゆゑ知らむと思へる人、さるもの要じて、わざとその人かの人にせさせたまへるとたづね聞きて案内するも、

(蓬生巻、②三二八頁)

とあるように、高級品である黒貂の毛皮を所有していた点、邸の調度品を「わざとそのひとかの人にしてさせたまへる」と人に命じて作らせた描写から、故常陸宮存命時の暮らしさえ苦しかったと思わせる女房たちの言葉はあれど、当時は比較的豊かな日々を送っていたことが想定される。これらの様子から、常陸太守を補任されていた故常陸宮の経済基盤自体は

安定しており、生活の困窮は故常陸宮の死後始まつたものと
考えられよう。

調度品とは異なるものの、それに関するものとして、賀陽
親王はものづくりを得意としていたことが『今昔物語集』「高
陽親王造人形立田中語第二」の話から見えてくる。旱魃の起
きた年に、賀陽親王の製作したからくり人形によつて耕作用
の水を確保したするこの話では、「此モ皇子ノ極タル物ノ上

手、風流ノ至ル所也トゾ人讚ケル、トナム語リ伝ヘタルトヤ」
（『今昔物語集』、③二四九頁）と評されており、また、『栄花
物語』では、法成寺の万法会で寄進された様々な灯台につい
て人々が論評する中、「むかし賀陽親王といひし人こそ細工は
いみじかりけれ。それもがな」（『栄花物語』卷十九、②三四
三頁）と言う者があつたとも記されている。このように、細
工に関する興味関心が故常陸宮と賀陽親王には共通して見ら
れるのだ。

また、調度品に気を遣つていた故常陸宮邸は、邸自体も趣
向を凝らされた物であつたと考えられる。

塵は積もれど、紛ることなきうるはしき御住まひにて
明かし暮らしたまふ。

（蓬生巻、②二三三〇頁）

荒廃しているとはいゝ、故常陸宮邸は依然として美しさを
も見せている。史実を見れば人康親王が、「その山科の宮に、
滝落し、水走せなどして、おもしろく造られたるに」（『伊
勢物語』一八〇頁）と山科の地に壯麗な邸を建てていたこと
と重なる。

次に、故常陸宮が得意としていたものに着目したい。

「（前略）琴をぞなつかしき語らひ人と思へる」と聞こゆ
れば、「三つの友にて、いま一くさやうたてあらむ」と
て、「我に聞かせよ。父親王の、さやうの方にいとよしづ
きでものしたまうければ、おしなべての手づかひにはあ
らじと思ふ」と語らひたまふ。

（末摘花巻、①二六七頁）

大輔命婦から末摘花について初めて話を聞いた光源氏は、
故常陸宮が琴の名手であつたと評価する。しかし、当該場面
からは琴のみならず、故常陸宮が「三つの友」すべてに親し
んでいたと考へる事も可能なため、詩・琴・酒に関する評価
について見ていただきたい。

まず、詩については和歌として故常陸宮が得意であつたと
される。

常陸の親王の書きおきたまへりける紙屋紙の草子をこそ、

（延長四年二月条）

見よとておこせたりしか、和歌の體脳いとところせう、
病避るべきところ多かりしかば、

（玉鬘卷、③一三八頁）

末摘花が光源氏に見せた歌論書は故常陸宮が書き残したもの

であり、親王が和歌に精通していたことがうかがえる。実とともに箏道の師匠と弟子の系図である『秦箏相承血脉』（成立年未詳）に名を連ねていることからも箏を非常に得意としていたことがうかがえる。

そして、酒については葛井親王が晩年酒を好んだ様子が見える。葛井親王は酒以外にも声楽や管弦を好んだらしく、

在した常陸太守補任歴のある親王では、惟喬親王・貞数親王の和歌がそれぞれ勅撰集に入集している。よつて両名の和歌に対する造詣が深かつたことは明白であり、故常陸宮と各親王の重なりが見えよう。

親王耽愛声楽。殊翫絲管。晩年好酒。志在燕樂。累日連夜。淵醉忘疲。

（親王は声楽を愛し耽る。殊に絲管を翫ぶ。晩年酒を好み。志燕樂に在り。累日連夜。淵醉し疲れを忘れる。）

（文德寒錄）卷一、嘉祥三年四月二日条

ける花宴にて、

という記録も残つており、特に故常陸宮との重なりが見えてくる。

このように、故常陸宮の生活や親しんだものについて史実

の親王との重なりが多く見られ、特に常陸太守を補任された親王は文化的な面をもつていたのである。

其後管絃頻奏、吟詠不止、仰常陸太守親王彈箏、中納言藤原朝臣彈琵琶、朕彈和琴、
(其の後管弦を頻りに奏で、吟詠止まず、常陸太守親王彈箏を彈かむと仰し、中納言藤原朝臣琵琶を弾き、朕は和琴を弾き、)

四 禅師の君と常陸太守を補任した親王

「醍醐の阿闍梨の君の御あつかひはべるとて、衣どももえ縫ひはべらでなん。皮衣をさへとられにし後寒くはべる」と聞こえたまふは、いと鼻赤き御兄弟なり。

（初音卷、③一五四頁）

さて、故常陸宮は出家した様子がない人物として描かれるも、死の間際に出家したと考えると違和感はない。対して末摘花の周辺人物として兄である禅師の君は早くに出家した人物として登場する。史実の親王の中で禅師の親王と呼ばれた人物には人康親王と惟喬親王がおり、特に人康親王は『伊勢物語』に「山科の禅師の親王」として登場する。この山科は醍醐寺が建つ土地でもあることから、禅師の君が後に醍醐の阿闍梨として再登場したのは、人康親王のイメージを喚起させる意図もあつたのではないかと考えられる。

次いで二名の親王と禅師の君との重なりについて経済状況などから検討したい。

・はかなきことにもとぶらひきこゆる人はなき御身なり。ただ御兄弟の禅師の君ばかりぞ、まれにも京に出でたまふ時はさしのぞきたまへど、それも世になき古めき人にて、同じき法師といふ中にも、たづきなくこの世を離れたる聖にものしたまひて、しげき草蓬生をだにかき払はるものとも思ひよりたまはず。

（蓬生卷、②三三一九頁）

右の二例から見えるように、末摘花の兄である禅師の君は人付き合いが少なく、かつ経済的に苦しんでいた。同様に経済的不如意に陥っていたのは惟喬親王である。外戚による援助を望めなかつた惟喬親王は、『日本三代実録』に「无品惟喬親王益封百戸（无品惟喬親王益百戸を封ず）」（貞觀十六年九月廿一日条）として、惟喬親王が出家した二年後に封百戸が与えられた旨が記されている。これは、初音卷において末摘花がなげなしの衣類を手渡さざるを得なかつたほど、兄の禅師の君が苦しい生活を送つていた様子とも重なるだろう。

以上、禅師・醍醐の阿闍梨といった呼称や経済状況は、わずかな違いを残しつつも、故常陸宮の子である禅師の君にも常陸太守を補任した親王のイメージを引いて造型されたことを示す、重要な手がかりとして認められよう。

冒頭で述べたように、故常陸宮のモデルとして、先行研究では惟喬親王・昭平親王・代明親王の三名が指摘された。しかし、いずれの親王も故常陸宮、もしくは禪師の君のモデルとしてはいささか不審な点が残る。

まず惟喬親王の困窮は出家後の話であることから、故常陸宮の貧困とは異質のものである。加えて、惟喬親王以外にも二度常陸太守へ補任された親王は複数名いるため、常陸太守の補任の回数は故常陸宮の准拠を個人に求める要素たり得ないと考えられる。また、昭平親王については、経歴などとの矛盾は特に見られないものの、『源氏物語』作中における故常陸宮自身の特徴がさほど反映されていない点を考慮すべきである。なお、皇籍復帰という昭平親王の特徴は重要であり、故常陸宮が昭平親王の影響を受けたならば、皇籍復帰に関する一文が作中に見えても違和感はない。実際、光源氏の処遇に関し冷泉帝は、

最後に、末摘花自身に常陸太守という父の官職がどのような影響を及ぼしたのか確認をしていく。住環境、経済状況についてはいずれも故常陸宮存命時代に劣るのは先述した通りである。また、故常陸宮が好んだ三つの友に関しては、酒以外についての描写が見られる。

一世の源氏、また納言、大臣になりて後に、さらに親王にもなり、位にも即きたまひつるも、あまたの例ありけ

・ほのかに搔き鳴らしたまふ、をかしう聞こゆ。なにばか

と皇籍復帰に関する先例に言及している。そして代明親王については、先述したように、あくまで『花鳥余情』に名前が載る程度であり、故常陸宮との重なりはほとんど見られない。従来のような一対一のモデルを特定するような研究では親王官職のもつ役割が不明瞭なままに終わり、作中人物の人物造型を充分に理解するには及ばない。よって、官職 자체の持つ特徴や、複数の実在した該当する官職を補任した親王の様々な側面を取り入れることが必要とされよう。

六 末摘花へ投影される常陸太守

り深き手ならぬど、物の音がらの筋となるものなれば、聞きにくくも思されず。

(末摘花巻、①二六九頁)

・月やうやう出でて、荒れたる籬のほどとましく、うちながめたまふに、琴そそのかされてほのかに搔きならしたまふほど、けしうはあらず。すこしけ近く、いまめたるけをつけばやとぞ、乱れたる心には心もとなく思ひゐたる。

(末摘花巻、①二八〇頁)

まず、琴に関する二つの評価には、「をかしう聞こゆ」「けしうはあらず」と一見高評価を得るもの、どちらも「物の音がら筋ことなるものなれば」「心もとなく思ひゐたる」と光源氏が不満に思う様子も同時に描写されている。また、和歌に關しても、

「古代の歌詠み」と言われるよう、末摘花が当世風の和歌は詠めない点に光源氏は不満をこぼす。しかし、末摘花自身は琴・和歌とともに自信があつたらしく、
(玉鬢巻、③一三八頁)

「聞き知る人こそあなれ。ももしぎに行きかふ人の聞くばかりやは」とて召し寄するも
(末摘花巻、①二六四頁)

さても、あさましの口つきや、これこそは手づからの御事の限りなめれ、侍従こそとり直すべかめれ、

(末摘花巻、①二九九頁)

・姫君も、おぼろけならでし出でたまへるわざなれば、物に書きつけておきたまへりけり。

と、人からの手直しが必要だと思わせる程度である。のちに
も、

「古代の歌詠みは、唐衣、袂濡るるがごとこそ離れねな。まるもその列ぞかし。さらに一筋にまつはれて、いまめきたる言の葉にゆるぎたまはぬこそ妬まことははたあれ。」

(玉鬢巻、③一三八頁)

（末摘花巻、①三〇二頁）

桂と、よき衣箱に入れて、つつみいとうるはしうて奉れ
たまへり。

・「（前略）常陸の親王の書きおきたまへりける紙屋
紙の草子をこそ、見よとておこせたりしか、」

（玉鬘巻、③一三八頁）

と、光源氏からは不評であつた歌であつても努力して詠んだ
物として書き残しており、またその後には父親王から受け継
いだ歌論書を光源氏へと勧めている。このように、少なくと
も末摘花は琴・和歌ともによくしているという自認があつた
のである。

次いで、調度品に関連し末摘花が他者へ贈り物をする際に
用いた箱について見ていきたい。

末摘花が贈る品は、「をかしげなる」「よき」などすぐれた
箱に入っている。これは、細工に興味関心をもつていた実在
の常陸太守、ひいては故常陸宮の特徴を引き継いだ描写とも
言えよう。ただし中身に関しては困窮に喘いでいたこともあ
り、自身の抜け毛を集めた鬘や、色あせた小袴など好ましい
ものではない。

以上の琴・和歌や箱などから見えるように、末摘花は故常
陸宮より受け継いだものが末摘花自身の特徴として数えられ
る。では、それが意味するところは一体何か。

端的に言えば、直接的な常陸太守像の投影である。末摘花

を故常陸宮と重ねることで可能になる表現であり、故常陸宮
と末摘花の僅かな差異というのはあくまで常陸太守のもつ要
素を受け継いだという点において、単なる希釈に過ぎないの
だ。邸や調度品は父親王の残した物を使い続けているため當
然のこと、例えば琴については、父親王から教わった楽器を

男君に聞かせるという点で明石の御方や宇治の姫君たちとの
違いが現れている。

・青鈍の細長一襲、落栗とかや、何とかや、昔の人のめで
たうしける袴一具、紫のしらきり見ゆる畝地の御小

他に黒貂の毛皮が挙げられる。従来指摘されたように重明

（蓬生巻、②三四一頁）

入れて、

親王——源邦正の関わりを考慮すべきであるものの、経済的基盤の整つた官職である常陸太守から受け継いだ品物として捉えるならば、黒貂の毛皮とは単に故常陸宮が充分な俸料を得ていたことを強調するために用いられたものであると判断できよう。即ち、常陸太守の富貴性を示すために用いられた黒貂の毛皮を所有していたのが重明親王であり、その親子関係ゆえに源邦正の容貌が末摘花に与えられたと考えられるのである。

おわりに

『源氏物語』に登場する故常陸宮は、常陸太守の官職がもつ經濟的基盤の安定、そして史実の親王が持つ文化的な側面を取り入れたものとして造型された。また、故常陸宮同様、禅

師の君や末摘花は史実の常陸太守の特徴を直接的に与えられたのである。

このことは、従来のごとき一对一の史実と作中の登場人物の比定では、登場人物の造型について探るに不足し、准拠の研究に対する可能性を狭めていることを示唆している。特に一般臣下の女に比べ婚姻も容易でない二世女王については、記録も少なく、系譜にこだわらない准拠研究が必要とされよ

う。既に式部卿が宿老の親王が補任する官職であるため、その娘である朝顔斎院が世間から重んじられたということは指摘されてきたが、末摘花もまた、文化人の補任された常陸太守という官職の娘として琴や歌を嗜む女君として登場し、他者から評価をされる人物として描写されたのである。

※本文の引用は『源氏物語』『今昔物語集』『采花物語』『伊勢物語』——『新編日本古典文学全集』（小学館）、『花鳥余情』——『源氏物語古注集成』（おうふう）、『醍醐天皇御記』——『続々群書類従』（続群書類従完成会）、『類聚三代格』『日本三代実録』『文徳実録』——『新訂増補国史大系』（吉川弘文館）、『江家次第』——『神道体系』による。

注1

池田亀鑑「源氏物語の構成とその技法」（『望郷』八、一九四九年六月）

〔昔蕃客參入時、重明親王乘「鴨毛車」、著「黒貂裘八重」見物、此間蕃客縫以「件裘一領持來為三重物」、見「八重」大懸云々、（江家次第）卷第五「上申日春日祭事」二七二三頁〕。重明親王は黒貂の毛皮を八枚重ねて渡來した客の前に現れている。黒貂の毛皮は相当な高級品であつたため、一枚しか持つていなかつた蕃客は恥じ入つたという。

注 3

上総国 常陸国 上野国

『今昔物語集』「左京大夫□付異名語第二十二」に「長少シ細国ニテ、極クアテヤカナル様ハシタレドモ、有様姿ナム嗚呼也ケル。頭ノ鐘頭也ケレバ、頭ハ背ニ不付ズシテ、眼皮ハ黒クテ、鼻鮮ニ高クテ、色少シ赤カリケリ。唇ハ薄ク色モ無クテ、咲バ歯ガチナル者ノ斷ハ赤ナム見エケル。音ハ鼻音ニテ高カリケリ。物云ヘバ一内響ナゾ聞エケル。歩ビバ背ヲ振り尻振テゾ歩ビケル。其ノ人、殿上人ニテ有ケルニ、責テ色ノ青カリケレバ、□ノ殿上人、皆此レヲ、青経ノ君トゾ付ケルヲ咲ヒケル。」(4)二一〇(二二一頁)とある。末摘花の容貌は、「まづ、居丈の高く、を背長に見えたまふに、さればよと、胸つぶれぬ。うちつぎて、あなたたはとは見ゆるものは鼻なりけり。ふと目ぞとまる。普賢菩薩の乗物とおぼゆ。あさましう高うのびらかに、先の方すこし垂りて色づきたること、ことのほかうたてあり。色は雪はづかしく白うて、さ青に、額つきこようなうはれたるに、なほ下がちなる面やうは、おほかたおどろおどろしう長きなるべし。瘦せたまへること、いとほしげにさらほひて、肩のほどなど、痛げるまで衣のう上まで見ゆ。」(末摘花卷、(1)二九二(二九三頁)であるため、背や鼻の高さ、額の出ていること、色の青白さなどが共通している。

注 4

注 8
注 10

栗山元子「末摘花卷における引用の諸相」(『国文学研究』一二五、一九九八年六月)

塚原明弘「常陸の宮の晩年の姫君」(『國學院雑誌』一二二一(一)、一二〇二年二月)

坂本共展「源氏と末摘花」(『源氏物語作中人物論集』勉誠社、一九九三年)

天長三年九月六日

安田政彦「親王任國」(『平安時代皇親の研究』吉川弘文館、一九九八年。初出「親王任国制の展開——太守補任をめぐって」『古代文化』三七(二)、一九八五年五月)

安田政彦「親王任國太守と大宰帥の補任について」(『平安時代皇親の研究』吉川弘文館、一九九八年)

宗康親王は承和一一(八四四)年の元服を執り行つた翌年に大宰帥に補任され、途中中務卿を兼ねるも、嘉祥三(八五〇)年父・仁明天皇の入道とともに出家した。親王官職の中でも優遇された可能性のある大宰帥の補任期間が約五年であつたことをふまると、宗康親王が常陸太守を補任されなかつたことに違和感はない。

注 5

注 9

注 10

注 7
『類聚三代格』卷五、天長三年九月六日太政官符
応三親王任「國守」事

(みのつ みどり・本学大学院博士後期課程)